

# 仙台で開発 意志貫く

仙台港から直線で約1キロ離れた仙台市宮城野区出花の事業所は東日本大震災の津波に遭い、遺伝子診断などに用いる分析機器は全て使えなくなつた。ライブルである外国資本のバイオ企業に顧客を奪われ、回復基調だった業績は震災前の半分に落ち込んだ。独自の開発力で国際市場に打って



遺伝子診断を行う社員。染色体は本来、同じ形のものが二つで一对だが、異常があると片方が短かったり、三つで一对になっていたりするという

出ようとしている。

「被災から数日間は何も考えられなかった。大きな喪失感を抱え、漂流していた気持ちを立ち直らせてくれたのは社員の頑張る姿や知人からの励ましのメールだった」

中川原寛一社長(58)はこう振り返る。

◆ 気持ち切り替えた後の行動は早かった。

## 日本遺伝子研究所

(仙台市宮城野区)

事業所の移転を決め、代わりの物件を探した。DNA(デオキシリボ核酸)やRNA(リボ核酸)の分子量を図る質量分析計、DNAの塩基配列を読む電気泳動装置など計60台(2億数千円相当)を発売、4月18日に同区萩野町のビルの一室で業務を再開した。

「地震保険も下りたが、持ち出しは億単位に上った」と中川原さんは語る。電子メールで何度かやりと

ん」という思いがあったからだ。自分たちが仙台で頑張っていれば、後に続く理系の起業家が現れると中川原さんは信じている。

業績回復の鍵を握るのは、昨年開発したDNAやRNAを常温でも安定的に長期保存できる保存液だ。欧州での販売に向けて認証規格取得を進めている。

きっかけは保存液のデータをとことし8月、遺伝子検査の世界標準化を提唱する英国の国立遺伝学レファレンスラボラトリー(NCRL)に送ったことだった。

電子メールで何度かやりと

## 見せます 底力

復興支える中小企業

事業を再開しても、バイオ業界は外資と激しい競争を展開しているだけに、業績回復は至難の業だと認識していた。

◆ 中川原さんによると、遺伝子診断は用いる分析機器や試薬などによって異なる分析値が算出されるため、研究者の間で「世界での標準化が必要」といわれてはいた。

◆ 中川原さんによると、遺伝子診断は用いる分析機器や試薬などによって異なる分析値が算出されるため、研究者の間で「世界での標準化が必要」といわれてはいた。

◆ 中川原さんによると、遺伝子診断は用いる分析機器や試薬などによって異なる分析値が算出されるため、研究者の間で「世界での標準化が必要」といわれてはいた。

◆ 中川原さんによると、遺伝子診断は用いる分析機器や試薬などによって異なる分析値が算出されるため、研究者の間で「世界での標準化が必要」といわれてはいた。



津波で分析機器などがめちゃくちゃになった旧事業所の1階部分。社員らは全員、2階に避難して無事だった(日本遺伝子研究所提供)

DNAやRNAの試料は氷点下80度など極めて低い温度で保存しなければならぬ上、解凍したら再度の保存はできなかった。このため、同一試料を異なる機関が分析してデータを比較し、標準化に向けた検討をするのは困難だった。

中川原さんは「世界的なニーズはあるはず。この保存液を業績回復の起爆剤にしたい」と意気込む。

## 再生

11土曜日掲載